開園120周年記念企画展

原三溪とその茶友たち ―齋藤清コレクション ―

【会期】2026年10月31日(土)～12月８日(火)
〔前期〕10月31日(土)～11月17日(火)
〔後期〕11月18日(水)～12月８日(火)

＊前期と後期で展示作品の一部について入れ替えがあります。
＊作者及び時代について、不明なものは空欄としています。

【出品目録】

No.	作者名	作品名	時代	材質・技法	員数
第１展示室					
1		鍍金獅子 (原三溪旧蔵)		金属製	１点
2		蓮弁（九体寺出） (原三溪旧蔵)		木製彩色	２点
3	原 三溪	白蓮	昭和６年(1931)	絹本着色	１幅
4	原 三溪	小林古径宛書簡	昭和７年(1932)11月２日	紙本墨書	１巻
5	原 三溪	鈍翁像	昭和４年(1929)正月	紙本墨画淡彩	１幅
6 【前期】	原 三溪	益田たか子宛書簡	昭和４年(1929)２月12日	紙本墨書	１巻
7 【後期】	原 三溪	多嘉子宛書簡	昭和４年(1929)10月21日	紙本墨書	１巻
8	益田 鈍翁	佛心鬼手		紙本墨書	１幅
9	益田 鈍翁	茶杓　銘「寿（堂可子の多免）」		竹材	１本
10	益田 鈍翁	茶	昭和８年(1933)	紙本墨書	１幅
11	益田 鈍翁	豆腐画賛	昭和２年(1927)	紙本墨画・墨書	１幅
12 【前期】	大綱 宗彦	豆腐画賛 (益田鈍翁箱書・益田鈍翁旧蔵)	江戸時代(19世紀)	紙本墨画・墨書	１幅
13 【後期】	原 三溪	益田鈍翁宛書簡(茶事招待の文)	11月28日	紙本墨書	１幅
14	益田 鈍翁	瓢香合　銘「貧僧」		瓢箪製	１合
15		写真「益田鈍翁・益田多喜」	昭和13年(1938)１月４日		１面
16	益田 鈍翁・益田多喜	短冊双福	【右幅】昭和13年(1938) 【左幅】右方短冊｜昭和13年(1938) 左方短冊｜昭和６年(1931)	短冊墨書	双幅
17	原 三溪	益田鈍翁宛書簡	大正７年(1918)１月14日	紙本墨書	１巻のうち
18	益田 鈍翁	原富太郎宛書簡 (チャールズ・ラング・フリーア来家御礼の文)	明治40年(1907)５月10日	紙本墨書	１幅
19	益田 紅艶	仁清茶碗狂歌画讃	９月７日	紙本墨書	１幅
20	益田 鈍翁 / 松永 耳庵	古都保貴帖		短冊墨書 紙本墨画・淡彩・墨書	１帖

No.	作者名	作品名	時代	材質・技法	員数
第２展示室					
21	野倉 鉄真(画) 原 三溪(讃)	帰雲	大正時代	絹本墨画 紙本墨書	1 巻
22	原 三溪	蘭画賛	大正２年(1913)秋	絹本墨画	1 幅
23	原 三溪	柳鷺	大正13年(1924)夏	紙本墨画・墨書	1 幅
24	原 三溪	雉子	昭和７年(1932)４月	紙本墨画・墨書	1 幅
25	原 三溪	伯牙弾琴	昭和４年(1929)秋	紙本墨画淡彩	1 幅
26	原 三溪	陶靖節	昭和４年(1929)	紙本墨画淡彩	1 幅
27	原 三溪	水草扇面		扇面淡彩	1 面
28	原 三溪	夕すずみ	昭和４年(1929)夏	紙本墨画淡彩	1 幅
29	原 三溪	清陰讀書	昭和４年(1929)８月	紙本墨画淡彩	1 幅
30	原 三溪	養魚翁	昭和９年(1934)３月	紙本墨画淡彩	1 幅
31	原 三溪	田家買馬	昭和６年(1931)５月	紙本墨画淡彩	1 幅
32	原 三溪	昇仙帖	昭和10年(1935)	紙本墨画淡彩	1 帖
33	原 三溪	蓮華草　濃州所見	昭和10年(1935)	紙本墨画淡彩	1 幅
34		な多籠 (原三溪箱書・原三溪旧蔵)		竹製	1 点
35	原 三溪	高山街		紙本墨画淡彩	1 幅
36	原 三溪	猿沢池畔	大正７年(1918)秋	紙本墨画淡彩	1 幅
37	原 三溪	奈良	昭和４年(1929)秋	紙本墨画淡彩	1 幅
38	原 三溪	梅溪山寺	昭和４年(1929)	紙本墨画淡彩	1 幅
39	原 三溪	鴨川春暁	昭和８年(1933)５月	紙本墨画淡彩	1 幅
40		婦た置 (原三溪箱書・原三溪旧蔵)		陶器	1 口
第３展示室					
41	仰木 魯堂	菖蒲	昭和11年(1936)５月	絹本着色	1 幅
42	仰木 政斎	楓茶杓　銘「登り鯉」		楓材	1 本
43	仰木 政斎	金輪寺茶入		木製漆塗	1 合
44	仰木 魯堂(画) 団 狸山(讃)	寒山拾得 無一物	大正13年(1924)	紙本墨画・墨書	1 幅
45		一梅なつめ(団狸山好)		木製漆塗	1 合

No.	作者名	作品名	時代	材質・技法	員数
46	仰木 魯堂(画) 原 三溪 (讃)	蟹	大正８年(1919)正月七日	紙本墨画・墨書	1 幅
47	中村 富次郎	原三溪翁像		紙本墨画	1 幅
48	森川 如春庵	信楽茶碗　銘「熟柿」	昭和４年(1929)	陶器	1 口
49	森川 如春庵	信楽茶碗	昭和４年(1929)	陶器	1 口
50	原 三溪	森川勘一郎宛書簡	昭和４年(1929) 2 月 1 日	紙本墨書	1 巻
51	松永 安左ヱ門	原三溪宛書簡	昭和12年(1937) 3 月23日	紙本墨書	1 幅
52	松永 耳庵	柳画讃	昭和31年(1956)	紙本墨画・墨書	1 幅
53	松永 耳庵	月ひとつ画讃	昭和35年(1960)	紙本墨画・墨書	1 幅
54	松永 耳庵	春秋双幅		料紙墨書	双幅
55	馬越 きく(画) 馬越 化生(讃)	紅葉画讃	大正13年(1924)	紙本淡彩・墨書	1 幅
56		【参考展示】三溪園所蔵 重要文化財　木製多宝塔	室町時代前期 *宝徳２年(1450)銘	木製彩色	1 基
57	田中 訥言	神楽	江戸時代後期 (18-19世紀)	紙本墨画淡彩	1 幅
58		籠茶箱 (原三溪旧蔵)			1 件 9 点
59		ラッカ緑磁遊環香炉 (原三溪旧蔵)		陶器	1 口
60		波斯緑磁中鉢 (原三溪旧蔵)		陶器	1 口
61	太田垣蓮月	山里は(扇面)	江戸時代後期-明治時代 (18-19世紀)	扇面墨画・墨書	1 幅
62	原 三溪	龐居士	昭和４年(1929)春	紙本墨画	1 幅
63	原 三溪	福井利吉郎宛書簡	昭和４年(1929) 9 月 3 日	紙本墨書	1 巻
64	岡倉 天心	松本幹一宛書簡	明治23年(1890) 8 月 4 日	紙本墨書	1 幅
65		【参考展示】三溪園所蔵 松本幹一肖像		紙・鉛筆	1 枚
66	安田 靫彦	【参考展示】三溪園所蔵 羽衣		絹本着色	1 幅
67	安田 靫彦	箱根の茶会		原稿用紙・インク・鉛筆	9 枚
68	釈 宗演	送原善一郎君之英京	大正２年(1913)頃	絹本墨書	1 幅
69	原 善一郎	矢代幸雄宛書簡	大正11年(1922) 4 月12日	便箋・インク	1 枚
70	原 三溪	【参考展示】三溪園所蔵 古梅図 并 讃 (釈 宗演旧蔵)		絹本墨書	1 幅
71	仰木 魯堂	観音	昭和５年(1930) 3 月17日	紙本墨画	1 幅
72	和辻 哲郎	送歌(浄土飯句)	昭和12年(1937) 8 月	絹本墨書	1 幅
73	原 三溪	高臥天地間		紙本墨書	1 幅

【人物解説】

原 三溪（はら さんけい）｜慶応４年(1868)－昭和14年(1939)
実業家、数寄者。岐阜県厚見郡佐波村(現在の岐阜市柳津町)生まれ。名・青木富太郎。代々庄屋を務める豪農・青木家の長男として生まれる。父の青木久衛は佐波村の村長、母の琴は南画家 高橋友吉(杏村)の長女。明治25年(1892)原善三郎の孫娘・屋寿と結婚、原家に入る。善三郎から引き継いだ原商店を原合名会社に改組。生糸の製糸から輸出まで事業を多角的に展開。明治39年(1906)三溪園を開園。美術品の蒐集、古建築の移築等文化財の保全・保護を行うとともに、近代日本画家等の支援も行う。益田鈍翁、松永耳庵とともに近代三茶人の一人に数えられる。

益田 鈍翁（ますだ どんのう）｜嘉永元年(1848)－昭和13年(1938)
佐渡国相川(現・新潟県佐渡市相川)生まれ。名・孝。実業家、数寄者。三井物産の創始者。大寄せの茶会「大師会」を組織するなど、「利休以来の大茶人」と称され、近代の茶の湯を牽引した。品川・御殿山に「碧雲台」、小田原に「掃雲台」を造成。数多くの茶道具を蒐集した。

益田 多喜（ますだ たき）｜慶応４年(1868) －昭和17年(1942)
女流茶人。号・紫明、有髪尼。吉田安兵衛の長女。妹は山縣有朋の室・貞子。

チャールズ・ラング・フリーア｜1854年－1919年
アメリカ・ニューヨーク州に生まれる。実業家。45歳でビジネスの第一線から退いて以降、美術品の蒐集と研究に専心。浮世絵や琳派をはじめとする日本美術作品も多数蒐集した。アジア美術を中心としたコレクションは、フリーアの死後、スミソニアン協会に寄贈され、1923年フリーア美術館が開館した。

益田 紅艶（ますだ こうえん）｜元治２年(1865)－大正10年(1921)
佐渡国相川(現・新潟県佐渡市相川)生まれ。名・栄作。骨董商。
益田鈍翁の弟。15歳で渡仏、次いで英米に滞在。帰国後、三井物産に入るが、若くして退く。日本橋仲通りに骨董商「多聞店」を開く。

松永 耳庵（まつなが じあん）｜明治８年(1875)－昭和46年(1971)
長崎県壱岐郡石田村(現・長崎県壱岐市)生まれ。名・安左ヱ門。
実業家、数寄者。戦後の電力再編成を牽引。所沢に別邸「柳瀬荘」を造営。戦後は小田原に「老欅荘」を構え、終の棲家とした。茶の湯を通じて交流した原三溪を深く敬愛した。

野倉 鉄真（のくら てっしん）｜明治９年(1876) －昭和36年(1961)
名古屋市生まれ。名・成忠。8歳で仏門に入り、僧侶としての道を歩むかたわら絵画を志す。帝国絵画協会会員として活動。山水画や画讃の作例が多い。

仰木 魯堂（おうぎ ろどう）｜文久３年(1863) －昭和16年(1941)
福岡県生まれ。名・敬一郎。数寄建築家、数寄者。益田鈍翁・団狸山・高橋箒庵などの茶室等の設計に携わる。大正5年(1906)鈍翁の依頼で箱根・強羅に「白雲洞」を建築。

仰木 政斎（おうぎ せいさい）｜明治12年(1879)－昭和34年(1959)
福岡県生まれ。名・政次。号・雲中庵。仰木魯堂の弟。木工芸家、数寄者。政斎が記した『雲中庵茶会記』は、近代数寄者の道具組や人的交流を知る上で欠かせない資料。

団 狸山（だん りざん）｜安政５年(1858)－昭和７年(1932)
福岡県生まれ。名・琢磨。実業家。男爵。欧米各国の鉱山業を視察後、工部省官吏、三井鉱山会長、三井合名理事長、日本経済連盟会長などを務める。昭和７年(1932) 3月５日、血盟団事件により倒れる。四女の寿枝子は、原三溪の長男・善一郎の妻。

中村 冨次郎（なかむらとみじろう）｜明治25年(1892)－昭和61年(1982)
旧姓・川田。岐阜県生まれ。明治35年(1902)、骨董商「好古堂」に入り、大正10年(1921)好古堂の娘婿となる。原三溪が主催した茶会にもたびたび参加した。

森川 如春庵（もりかわにょしゅんあん）｜明治20(1887)年－昭和55年(1980)
愛知県一宮市生まれ。名・勘一郎。素封家、古筆研究家。幼少時から茶の湯を極め、16歳で本阿弥光悦作の黒楽茶碗「時雨」を入手するなど、数寄者としての頭角を表す。大正12年(1923)三溪園で開かれた大師会茶会では蓮華院の席を担当した。

馬越 化生（まごし かせい）｜弘化元(1844)年－昭和８年(1933)
備中国後月郡木之子村(現・岡山県井原市)生まれ。名・恭平。実業家、数寄者。日本麦酒会社を創立、「東洋のビール王」と称された。

田中 訥言（たなか とつげん）｜明和４年(1767)－文政６年(1823)
江戸時代後期に活躍した復古大和絵師。

太田垣 蓮月（おおたがきれんげつ）｜寛政３年(1791)－明治８年(1875)
幕末期の尼僧、歌人・陶芸家。

福井 利吉郎（ふくいりきちろう）｜明治19年(1886) －昭和47年(1972)
岡山県生まれ。旧姓・岡。美術史学者。文部省の古社寺保存課に勤務。東北帝国大学教授、兵庫県美術研究所長、文化財保護委員会専門委員を歴任。イギリス在留中、福井は東北大学のために、（伝）顧愷之(こ・がいし)筆「女史箴図巻」(大英博物館所蔵)の模本を小林古径・前田青邨に嘱して制作した。

岡倉 天心（おかくら てんしん）｜文久２(1862)年－大正２年(1913)
神奈川県横浜市生まれ。名・覚三。東京美術学校(現・東京藝術大学)の二代校長。新日本画運動を起こし、日本美術院を設立。新進日本画家(今村紫紅、前田青邨、安田靭彦)などを原三溪に紹介、支援を依頼した。美術雑誌『国華』の編纂に携わる。

松本 幹一（まつもと かんいち）｜嘉永３年(1850)－大正４年(1915)
大阪生まれ。出版人、国文学者、漢学者。九鬼隆一、岡倉天心らの社寺什宝調査に同道。美術雑誌『国華』の編集に際し、大阪朝日新聞の監工課長として参加。娘の河杉初(1896－1990)は歌人で、原三溪の長女・西郷春子(1894－1951)と交流があった。

安田 靫彦（やすだ ゆきひこ）｜明治17年(1884)－昭和53年(1978)
東京日本橋生まれ。名・新三郎。日本画家。小堀鞆音に師事。東京美術学校(現・東京藝術大学)に入学するも、秋に退学。岡倉天心に招かれ、茨城県五浦の美術研究所に招かれる。明治44年(1911)より原三溪の援助を受ける。今村紫紅とともに日本美術院再興に参与。帝室技芸員、法隆寺金堂壁画保存調査委員、東京美術学校教授、日本美術院初代理事長などを歴任した。

釈 宗演（しゃく そうえん）｜安政６年(1859)－大正８年(1919)
若狭国大飯郡高浜村(現・福井県高浜町)生まれ。臨済宗の僧。円覚寺二百七世住持。円覚寺派第二・第五管長。のちに東慶寺に住持。原家とは原善三郎(原三溪の義祖父)時代より親交が深く、横浜滞在時は三溪園内の「寒月庵」などの建物を宿とした。

原 善一郎（はら ぜんいちろう）｜明治25年(1892)－昭和12年(1937)
原三溪の長男。アメリカに留学し、欧州も視察。美術愛好家としても知られた。大正６年(1917)11月団琢磨の四女・寿枝子と結婚。
昭和12年(1937) 8月６日、脳貧血により逝去。遺稿歌集『夜の雪』。

矢代 幸雄（やしろ ゆきお）｜明治23年(1890)－昭和50年(1975)
横浜市生まれ。美術史家。大正５年(1916)タゴールが三溪園に滞在時に通訳を担当し、原家と親交をもった。三溪園に集った新進芸術家とも親しく交流した。大正10年(1921)3月、西洋美術史研究のためにヨーロッパに留学。戦後は三溪の蒐集品を原家より譲り受け、大和文華館に納めた。

和辻 哲郎（わつじ てつろう）｜明治22年(1889)－昭和35年(1960)
兵庫県姫路市生まれ。哲学者。著書に『古寺巡礼』などがある。